
プリンセスにドキッ

桂木 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセスにドキッ

【NZコード】

N5621D

【作者名】

桂木 景

【あらすじ】

無愛想・冷血漢の主人公が変わっていくお話

清々しい朝。カーテンの隙間から差し込む朝日で少年は目を覚ました。

どこか遠くはるか遠くを見つめている澄んだ瞳。キリッと引き締まった顔は寝起きとは思えない。やや長めの髪をかき上げ、静まり返った台所へと向かう。どうやら少年は一人暮らしのようだ。

慣れた手つきで熱したフライパンに卵とベーコンを乗せる。その間にトーストの準備。うん、実に手際が良い。

マンションの中に香ばしい香りが支配する。品の良い食器棚からこれまで品の良い皿を取り出し、ベーコンエッグを盛り付ける。誰もいない孤独な空間の中の朝食。諸君は味気ないと思ひだらうが、コレが彼の日常なのだ。

食べ終わると食器を丁寧に洗い、洗顔してから制服に袖を通す。この格好からして市内の高校生のようだ。
等身大の鏡で皺がないか厳重にチェック。少し神経質なのだろうか？
そして玄関に飾つてある、写真に向かう。
「美羽行つてくる。」

彼はそつと玄関を閉めて、まだまだ暑い9月の空の下を歩き出す。

これが彼 望月 隼人の日常だ。

もちづき

はやと

教室に入ると、暑いのかほとんどの生徒はダウンしていた。隼人はだらしないな
と思う。

「お～は～よ～お～。」

生気が感じられない声で女子生徒が隼人に声を掛ける。

「おはよう。」

隼人は挨拶を返して素早く席につく。

「毎度、毎度冷たいな～。この冷血男！～あんたの体に暖かい血が本当に流れてる

の？」

「基本構造は君たちと同じだよ。」

サラッと流す。これ以上がまつて欲しく無いようで、本に目を落とす。

隼人に相手にしてもれないことを悟ったのか、女子生徒は再び机と平行になつた。

三々五々、教室に生徒が集まり始める。そして朝礼を知らせる無機質な音。

そんな日常の中、先程の女子生徒以外隼人に挨拶しようとする者はいなかつた。
これもまた、彼の日常なのだ。

教室のドアが開かれ、担任の入場。なにやら一ヤニヤしている。

「今日は転校生を紹介する。」

教室はざわついた。もちろん隼人以外は。

彼にとつては誰が転校してこよつと関係無かつた。小学生から友達を作らなかつ

たのだ。仲間よしざまといよりも孤独こくどくを選んだ。

「吉澤よしざわ 愛理あいりです。よろしくお願ねがいします。」

全国の転校生が必ずする定型文。

隼人はその時点で…寝ていた。

皆が嬉々として吉澤を見ているのに、隼人だけ寝ているのは吉澤のプライドを酷

く傷付けた。彼女は他の…女子生徒から見てもうつとりするような容姿の持ち主

。自分でもそれを表には出さないもののかなりの自信があつたのだ。吉澤は密かに決意した。必ずあの男を落とすと。

第2話

気付くと既に一時間目の授業が始まっていた。どうやら朝礼の時にいつの間にか寝てしまったようだ。

ふと横の席に視線を感じ、振り向くと見慣れない女子生徒が座っていた。そう言

えば担任が転校生がどうたら…などと一人納得してしまった。
「教科書まだもらつて無いんだけど…良かつたら見せてくれませんか?」

ふいに声を掛けられて隼人は少し狼狽した。まさか自分に…。
隼人は無言・無表情でカバンから教科書を抜き取り、転校生に手渡す。

「見ないんですか?」

不思議そうに転校生は尋ねる。確かに貸しておいて、本人は見ないとなるとかなり不自然だ。

「見なきとも分かるから。」

「そうですか。賢いんですね。」

「普通だよ。」

隼人は煩わしくなったのか転校生とは反対方向…つまり窓から空を見上げた。雲

一つ無い快晴。残暑がキツいこの時期に雲がないと恨めしく思つてしまつ。

休み時間になると転校生の周りに人垣が出来るのは全国的に見ても珍しい事では無いだろう。隼人は人を極端に嫌うのでもちろんこう言つた事態も

煩わしく感じ

てしまふ。厄介な転校生に気付かれないようにソッと教室を後にした。

隼人は昼休みになつても教室に戻らうとせず、屋上で寝ていた。9月の日差しこそ

強いものの、吹き付ける風が心地よい。

「こんな所にいたんだ。探したんだよ。」

朝、唯一隼人に挨拶をした女子生徒だ。ビニール袋を片手にトコトコ歩いてくる。

「えっと…お前は…」

「相変わらずだね（笑）山本だよ。」

「そうか…。」

「毎日言つても覚えないなんて単に覚える気が無いんでしょう？」

「……」

隼人は生まれてこの方一度も人の名前を覚えようとした事は無かつた。少なくとも美羽以外は……。

「まあいいや。一緒に食べよう…！」

ビニール袋からサンドイッチが3つと牛乳パックが2つ出て来た。

「望月くんつて玉子サンド好きだったよね？」

「ゴソゴソしながら山本は尋ねる。

「なんで知つてんだ？」

「前購買で買つてたのをたまたま見たんだ。」

エヘヘと照れ笑いする。

「そうか…。それより、いくらだ？」

「何が？」

「サンドイッチ代。」

「今日は私のおごつい。今度おごつてね…！」

「ならそうするとしよう。」

隼人は玉子サンドにかぶりついた。それをなぜか嬉しそうに山本が見つめる。

「美味しい？」

「お前が作った訳じやないんだから聞いてどうする。」

暗に飯時は静かにしろ、と言いたいのだろう。

「でも気にならない？」

山本には隼人の意志が伝わらなかつたようだ。

「別に。」

「私が作つてきたら感想聞かせてくれくれる？」

「購買で済ますからわざわざ作らなくてもいい。」

手作り弁当の申し出を拒否する。

「冷たいな～。彼女出来ないよ？」

彼女　その言葉に隼人の顔はわずかに引きつったように感じられた。

「彼女は……必要ない。俺は独りで生きていく。」

「それってさ、なんか寂しくない？」

快活で可愛らしかつた山本の顔が曇る。

「別に……。」

隼人はそれ以上なにも喋ろうとはせず、はるか遠くの空を見つめていた。

残暑の晴れ空に隼人は何を見いだそとしているのだろうか？

第3話

昼休みが終わり、次の授業が始まる直前に隼人は半ば強引に山本に連れられて戻ってきた。普通、こういった事態はクラスの連中……特に男子陣がはやし立てるものなのだが、誰もそうしようとはしなかつた。隼人をまるで空気みたいに扱っているのだ。

「お帰りなさい。どこに行つてなんですか？」
席に着くと同時に転校生が話掛けてくる。

「空を見に行つていた。」

「空……ですか？」

不思議そうな顔をしている。隼人は無言を返事に、素早く教科書を取り出して転校生に渡した。

「すいません。これ2時間目の時の教科書です。ありがとうございます。」
丁寧に礼を言つてから教科書を手渡す。

「ん……。」

受け取った教科書をカバンに放り込み、睡眠へ。

……と入る前に事態を察したのか、教師が指名してそれを阻止した。
隼人は煩わしそうに答えて着席。バレないように寝る事にした。

授業中に転校生が何度も話し掛けて来たがそれらを軽くスルー。勉強しろよ、と
言いたいのを何度も我慢したことか。

授業が終わっても煩わしいのが来るわけで、またもやサンドイッチ女子生徒が絡んできた。

「帰りケーキおごつてえー。」

隼人の近くに来てそうそう物乞い。

「高いケーキ目的にサンドイッチを奢ったのか?」

「それもあるかなー?でも奢ってくれるって約束したよね?..」

「確かに約束はしたが、俺は行かんぞ。行くなら独りで行け。」

「それじゃ奢つて貰え無いじゃん!..!」

「.....。」

「やつた」

それだけ言つと友達の元へと行つてしまつた。

「仲よろしいのですね。」

羨ましそうな、やや上目使いで言つ。普通の男なら一撃で擊沈するのだが、隼人は一筋縄では落とせない。

「煩わしいだけだ。」

転校生は隼人に何の変化も見受けられなかつた事に多少驚きつつ、会話を続行させれる。

「そんな事はないと思ひますが.....。山本さん優しい方ですよ?」

サンドイッチ女子生徒の名前が山本だと思い出し、自分のやる気の無さに心内苦笑する。

「優しい奴なのか。だが、俺には関係ないな。」

「暗い.....暗すぎます。私がその性格を直して差し上げましょー!..!」

「いや、結構です。」

隼人はコレからトンでもないことに巻き込まれる予感がした。

第4話

放課後、山本に見つからないように隼人は校門を出た…つもりが、ちやっかり背

後に回られていた。

「望月くん、私から逃げようとしてなかつた?」

満面の笑みで凶悪な口調で言うセリフはそれだけで氣絶させる威力がある。

「気のせいじゃない?」

隼人は冷や汗タラタラ言い訳し始めた。

「まいいわ。しつかり奢つて貰うわよ。」

女と言う生き物は怖い、隼人はその事を改めて認識した。

「コッチよ。」

山本は隼人を案内し始めた。もちろん先頭を歩いているわけで、逃げようと努力

すればどうにでもなるだろう。しかし、後々の事を考えてこの場は大人しく彼女に従う。

暫く歩くとシックな造りのオシャレなケーキ屋についた。ケーキ屋

と言えば日本

中の男子はあまり行きたがらない場所トップ5には入るだろう。だが、この店はな

ぜかそう言つた氣まずさを全く感じさせなかつた。

「いらっしゃいませ。」

店に入ると店員が対応する。爽やかな挨拶は隼人に好印象を与えた。

「こちらでお召し上がりになられますか?」

「はい。」

山本が応える。

「『』注文の方はお決まりでしょ？」「

どうやらその場で受け取るシステムのようだ。

「私はマロンケーキと…」

人が支払うのを良いことにドンドンケーキを注文していく山本。隼人は頭痛がし始めた。

「お連れの方はお決まりでしょ？」「

店員が隼人に聞いてくる。

「紅茶をポットで。」

「かしこまりました。お席の方に『』案内致します。」

店員に案内されたのはカップル用のシートだった。

「こここのケーキ美味しいんだよ？何で頼まなかつたの？」

「ケーキは好きじやない。それにお前頬み過ぎだ。」

「色々食べなくなっちゃつて。」

いたずらっ子みたいにペロリと舌を出す。

普通の男子生徒なら惱殺されてダウンなのだが、隼人は普通ではない。

「俺は紅茶を飲んだら帰る。お前はゆつくり食べればいい。」

「そんなの寂しいじやん。一緒に来た意味ないよ。」

さつきとは一変、甘えるような口調で隼人に迫る。

と、タイミング良く店員が大量のケーキと紅茶を持ってきた。山本は目を輝かせて食べ始める。

しばしの無言。これを好機に隼人は席を立つた。

「ドコに行くの？」

「トイレ。」

彼女にバレないようにさりげなく伝票を取り、トイレとは逆方向のレジへと向かう。

そして支払いを済ませ、彼女が居ることを伝えてから帰宅。ケーキ代だけで4000円飛んでしまった。

あの時キッチンとサンドイッチ代を払つておけば……と後悔しても後の祭り。一人

自信を呪いながら家路についた。

隼人がマンションに着くと、色々疲れたのかベットに倒れ込んで死んだように眠つてしまつた。

どの位寝ていたのだろう。目を覚ますとカーテンの隙間から朝日が……。隼人は朝日が差し込む窓の大きさに驚いた。『デカい、ただデカい。それ以上のお言葉はその窓には相応しくなかつた。いや、それを窓だと認知出来ただけでも凄い。

隼人は冷静に辺りを見回した。明らかに部屋の広さからして、自分のマンションの一室ではない。そう……大きな屋敷の部屋のようだ。調度品もなかなかセンスが良く、欲しいと思つてしまつたくらいだ。

「あら？ 起きた？」

いつの間にかドアの所に女性が立つていて、風貌からして20代後半であろうか

？

「ここは？」

「冷静ね。ここは吉澤の屋敷よ。あなた、取り壊し予定のマンションに一人残つ

ていたから仕方無くここに運び込んだのよ。」

吉澤と聞き隼人は耳を疑つた。吉澤財閥と言えば日本のトップ企業だ。

「取り壊し？ そんな話は聞いていませんが？」

「チラシと一緒に入っていたはずよ。」

隼人はチラシ類は読まずしてゴミ箱に放り込む習慣があった。どうやらその時に

捨ててしまっていたのだろう。

「そうですか……気付きました。本田中に出ますので」迷惑はお掛け致しません。」

「出るつて……行くあてはあるの？」

「その辺りは……なんとかなるでしょう。」

「待ちなさい。貴方、愛理と同じクラスよね？」

「愛理? 存じませんが?」

「会えば分かるでしょう……。それよりあなた、愛理のボディガードをしてみない? 衣食住は提供するわよ。」

「はあ……。なぜ自分が?」

「どうせ引き留めてもタダで住ませて貰うなんて、あなたのプライドが許さない

んでしょう? 同じ感じがするから分かるのよ。」

女性はフフフと笑った。

「それでは愛理さんに会つて気に入つて頂ければ、お引き受け致します。」

「ありがとうございます。私は弥生よ。愛理の母をしているわ。」

「随分とお若いですね。」

お世辞ではなく、隼人の本音だ。

「ありがとうございます。それじゃ、行くわよ。付いてきなさい。」

弥生さんに着いて屋敷を歩くものの道順を全く覚えられなかつた。

「食堂よ。一緒に食べましょ。」

ドアを開けて弥生さんは隼人を招き入れる。

「望月くん! ?」

聞き覚えのある声。そう、昨日からやたらと隼人に構つてくる転校生だ。

「紹介するわ。愛理のボディガードをしてもうつ望月 隼人くんよ。」

吉澤財閥侮りがたし。恐らく隼人の情報は全て收握しているのだろう。

「私は連華。れんか。愛理の姉よ。よろしくね。」

ポニー・テールがよく似合う活発な女性。それが隼人が受けた第一印象だ。

「よろしくお願ひします。」

今、隼人は吉澤の使用人。ここは頭を下げるのが礼儀。

「堅苦しい挨拶はこの位にして、食べましょ。」

弥生さんに促され、吉澤の隣に座る。当の本人は目を合わせることなく、黙々と食べていた

第6話

「ずっと一人暮らしだつたんだって？私も一度やってみたいのよ。」

吉澤と違い連華さんは良く隼人に話し掛ける。「気に入つて貰えたようだ。

「思つてはいるより良いもんじゃありませんよ。」

「どうして？」

「毎日飯の心配しなくちゃならないし、洗濯物を干すタイミングとか色々。」

「そう言われると確かに面倒臭いな。」

「ですが、一人暮らしの良さもあります。一長一短です。」

「どつちつかずだな、隼人は。」

「すいません。」

追い出されではかなわない、そんな理由から愛想を振りまいていた。

「そろそろ時間よ。準備なさい。」

弥生さんの指示で、皆席を立つ。相変わらず吉澤は下を向いてばかりで、話をし

ようとしない。隼人本人は話掛けられずに済んで安心していた。本人のキャラでは無いからだ。が、隼人は弥生さんに案内されるがまま食堂にたどり着いたので

、吉澤に聞かなければならない状況。仕方なしに尋ねることに。

「俺の部屋まで案内して欲しいんだけど……」

「部屋……ですか？」

「そ。部屋。」

「分かりました。こちらです。」

無表情で先を歩き始める。

だんだん見覚えのある景色になってきた。

「こちらです。私の部屋は右隣ですので、『ご用があればどうぞ。』立場逆転とはこの事か。完全に吉澤が使用人化している。逆にこれも気まずい。

「準備が出来たら廊下で。また案内して貰わないとならないからな。

「 気まずい雰囲気になつてきたので、隼人は逃げるように部屋に入つた。

改めて部屋を見渡す。大きな部屋に移されたタンス達は、場違いの用に思われた

。そして隅の方に食器棚が……。

何も見ないことにして、制服に着替え始める。

ふと隼人は重大な変化に気付いた。美羽の写真がドコを探してもない。美羽は隼

人にとつて大切な なのだから。

すぐさま行動に移すことにして。もちろん、弥生さんに聞いた方が一番早い。

廊下に飛び出すとすでに吉澤がいた。

「この時間帯に弥生さんはどこに居るんだ？」

隼人の必死の形相に吉澤はたじろぐ。

「どうかなさりましたか？ 部屋に不備でも……」

吉澤が言い終わらない内に隼人は叫んだ。

「弥生さんの所に案内してくれ！！」

吉澤は怯えたように体をビクッと震わせた。

「私室の方にご案内します。」

隼人の部屋からあまり離れていない位置に弥生さんの部屋があつた。

「弥生さんいますか？」

「居るわよ。どうかしたの？」

「少し尋ねたいことが……」

スッとドアが開き弥生さんが出てきた。

「前のマンションの玄関に飾つてあつた写真」存知無いですか？」

「写真？ああ、引き出しの中に入つてるわよ。」

「そうですか。ありがとうございました。」

隼人は安堵の息をついた。

「早くしないと学校に遅れるわよ。」

フフフと笑いながら、弥生さんは部屋に戻つていった。

「大切な写真なんですか？」

「ああ。」

隼人はあまりこの事には触れて欲しくはないらしく、自然と口を閉ざした。

「さつきは怒鳴つてすまなかつたな。」

「いえ、構いませんよ。それより早く仕度なさらないと、本当に遅刻してしまい

ますよ。」

相澤は準備万端に対して隼人は制服を着ただけ。それも彼らしくなく、かなりはだけていた。

「悪い。直ぐに準備する。」

部屋に駆け込むと教科書類を取り敢えずカバンに放り込み、美羽の写真を机の上に置いた。

「行つてくる。」

外にいる相澤に気付かれないよう、声を落として言つた。

「遅くなつた。」

部屋を出ると相澤は心配そうに時計を見ていた。

「ええ……急ぎましよう。」

早足に玄関まで行くと改めてこの屋敷の広さと財閥の財力を思い知つた。

噴水付きの広大な前庭に4階建ての洋館。

隼人が感銘と似た別の感動を受けてある間に相澤は近くに止まつていたベンチに

乗り込んで手招きしていた。どうやら乗れ、と言いたいらしい。

「毎日こんな車で通学してるのが？」

発車するなり一番に聞きたかったことだ。

「ええ……。これからは望月くんもコレで移動してもらつても構いませんよ。紹

介しますね。私の専属運転手の古川です。」

「古川です。望月様ですね？事情は奥様から伺っております。」

古川はゆつたりとしたスーツを着こなす老紳士といった印象を与えてくる。その

落ち着いた物腰から長い間相澤家に使えていたのが伺える。

「弥生さんから聞いていると思いますが、望月隼人です。一応、吉澤のボディガードをさせて貰っています。」

「お嬢様のボディガードをなさつてているんですか。頼もしい限りですわね。」

ホホホと快活に笑う。

「古川、早くしないと遅刻してしまいます。」

吉澤はたしなめる。隼人は少し気まずそうだ。

「失礼しました。」

古川さんは黙つて運転に集中した。

学校には古川の尽力で遅刻せずに済んだ。校門から少し離れた場所で降ろしてもらい、吉澤のやや後方を陣取る。学校では取り敢えず他人のフリをするつもりだ。俺には対象を向けないだろうが、クラスの連中が吉澤に質問責めにするだろう。

「おっはよーー！」

元気一杯に女子生徒が隼人に突撃していく。

「おはよ。」

無愛想に挨拶した後、席に付く。

「私の名前は？」

「お前朝からそのテンションで暑く無いのかよ。俺は見てるだけです
暑苦しいんだ
が…。」

さり気なく話題を変え、答えられない質問をスルー。彼女は色気を
アピールして
いるのか、制服のシャツのボタンを二つほど開けていた。若干胸元
が見えている。

普通の男子ならチラ見するものだが、隼人は完全スルー。読書に入
る。

「いつも通りじゃん
」「疲れる。アッチに行け。
「昨日勝手に帰ったのはどなた?
「う……
「奢れば良いってもんじや無いんだからね…！」

グサツ

「一時間待ったんだよ…！」

「店員さんに笑われたんだからね。」

ザクツ

ブシャー

「罰として今日から私の事を下の名前で呼びなさい…！」

「はあ？なんで？」

「恥ずかしい思いさせたいからですよ～。」

彼女の顔が若干赤くなっているのは隼人の錯覚だろうか？
それよりもコイツは意地でも名前を覚えさせるつもりなんだろうか
？

隼人と女子生徒のやり取りを真横で目の当たりにしていた吉澤は隼人を鋭く睨んでいた。

しかし隼人は慣れたもの。気付かないフリをして完全スルー。

「真由美って今日から呼ぶんだよ。」

「イヤだ。ウザイからあっち行け。」

「うわあ…。ツンツンしてるね（笑）萌。」

何を言い出すか、彼女はツンデレと勘違いしたようだ。

「一体何に萌たんだ？」

「ツンデレ？？」

「疲れる。」

隼人が困り果てていた時に、担任がちょうど良くなってきた。

「望月くんはモテるんですね？」

皮肉とも取れる良いよう。しかし彼女は雇い主の娘、隼人は機嫌を損ねるわけにはいかなかつた。

「今までそんな事は無かつたように思うけど。吉澤の勘違いじゃ？」

「なら良いのですが…。私のボディガードを担当なさっているのに恋愛などされたら、職務に支障をきたす恐れがあるので。」

「俺は恋愛なんて二度としないから大丈夫さ。」

顔を見られないよう、隼人は窓から空を仰ぎ見た。

「そうですか…。」

相澤は悲しそうに返事をした。

何語も無く午前中の授業は終了し、相澤と真由美から解放される昼

休み。

隼人は購買でパンを買い、お気に入りの場所で時間を潰すことになった。それは

校舎裏の巨木。頂上から見る空は最高だ。それにいつも探しに来る真由美に一度も見つかったことは無い。

パンをかじつていると案の定、真由美がせつせと隼人を探している様子。隼人の遙か下を走り回っている。一人巨木の上で笑つてしまっていた。決して他人には見せることの無い笑顔。コレも空に近いからだろうか？余りにも笑いすぎて、財布を落としてしまった。しまった、と隼人は内心自分に毒づく。

真由美はいないものの、取りに行くのははばかられた。今行くと見つかってしまう。いそうだからだ。
ふと財布を拾い上げたのは見たこともない女子生徒。迷わず上を向いて隼人に呼び掛けた。

「財布落としましたよーー！」
「わらい。」

仕方なしに巨木から降りる。

「最近また登り始めたの？」

隼人の怪訝な表情を読み取ったのか急いで付け足す。

「前から見掛けていたから。」

「空を見たくなってな。」

「山口さんから逃げるためじゃなくて？」

可笑しそうにクスクス笑う。

「それも少しはあるかな。」

笑いながら彼女の差し出す財布を受け取った。

「確かに1年3組みの望月くんだよね？」

「知っているんなら俺には近付かない事だ。噂くらいは聞いてるだろ？？」

「そんなの関係ないよ。それにタダの噂だし。」

「しかし全て現実だ。」

「そなんだ…。」

「また真由美が探しに来るかもしれないから。」

そう言い残し、隼人は歩き始める。

「私、1組の長谷川はせがわ！！」

足を止めて振り返った。

「生憎、名前と顔を覚えるのは苦手でな。」

長谷川は悲しそうな表情になつた。

「だが長谷川なら覚えてられそうだ。」

「ありがとう…！」

遠くに真由美の姿が見えたので、急いで校舎に入った。

第9話

「さつき校舎裏にいたでしょ？」

音楽の授業が始まると同時に真由美がしゃべりかけた。ちなみに前、吉澤。右、

真由美。左、長谷川といつなんとも痛ましい光景。読書諸君、理由は言わずとも

分かつて頂けるだろう？

「ねえってば！！！」

無視を決め込んでいた隼人に真由美が物理的な揺さぶりかける。

「だからなんだ。」

開き直る作戦に変更したのか、クールに応える。

「せつかくお弁当作つてきたのに！！」

「だから？」

「食べて欲しかったの！！」

「ふうん。」

真由美は目に涙をためてウルウル攻撃。何度も言ひように隼人は健全な男子高校

生にあるまじき精神を持つ男！！これしきの攻撃なんぞ軽く受け流す。

「ところで長谷川。」

隼人が名前を呼んだことに周囲は騒然となる。後ろの男子達は明日地球が滅びる

、なんて事まで真顔、真剣そのもので言つていたりする。あるまじき事態が発生

したのだ。

「は、はい！？」

突如呼ばれた長谷川はあたふたしていた。当然と言えば当然。

「宿題見せて。」

「あ…うん。」

すごすご」とワードを差し出した。

「字、綺麗だな。」

更に周囲にどよめきが走る。教師は何事かと立ち上がる始末だ。

あの鉄面皮が？！

無愛想世界ナンバー1が！？

俺の女神様

周囲の余計な声に段々隼人はイラついてきた。同時に眉がつり上がる。

真由美は無駄に隼人に付きまとっているわけでもなく、この危険サインを瞬時に

読み取った。

「今度私のおじりでティナー行こうよーー！」

長らく貧乏生活が続いた隼人にとってはあらゆる状況下においても瞬時に聞き分け、反応するワードがある。それは、「タダ」「奢る」「特売日」の3つ。通称、

貧乏生活の3原則。これを逃しては極貧生活を堪え忍べない。

「遠慮する。」

真由美はかなり激しいショックを受けた。

「何で！？」

当初の目的を達成し、奢らなくてもいい事になつたが真由美は納得出来なかつた。

。

「今は前と違う。」

「極貧生活じゃ無くなつたってこと？」

「そう言う事だな。」「

真由美は開いた口が塞がらずにいた。

「サンキュー。」

長谷川にワークを返して教師の戯言を聞き流しましたりとしていた。既にクラス

の半数以上が深い眠りについている。

隼人は右肩に重みを感じ、振り向くと真由美がスヤスヤ寝息を立てていた。

「うつとおうしいな。」

ボソッと呟く。

「女の子にもたれ掛かれるなんて、そうそうないよ。」

長谷川は声を落として囁く。

「コイツ無駄に重い。それこいつも付きまとつて冗談抜きに疲れる。」

「もしかして望月くんの事が好きなんじゃないの?」

いたずらっ子の用に目をキラキラさせる。隼人さえもハッとするような整った顔

立ちを一層引き立てる。

「俺には関係無い。」

「強がらなくともいいよ。本当は嬉しいんでしょ?」

「嬉しくなんかない。迷惑だ。」

「どうして?」

困ったような顔で尋ねてくる。

「一方的じゃないか。自分の勝手な気持ちを押し付けて、相手に返事を迫る。相

手が普通の男なら女子に泣かれるのがイヤだから渾々承諾の返事をしなければならない。お互い想い合っていない恋愛なんていつか切れてしまつも

のだ。お互い傷付き一度と同じ関係にはなれない……。長谷川はそんな事になつて

もいいのか？

「私は……そんな関係はイヤだな。」

「それに迷惑なんだよ。勝手に押し付けて、振られて泣く奴は。俺のことが好き

な奴は俺をその気にさせてみろよ。」

隼人は何かを求めるかのように蒼穹を眺めた。

本日の授業は全て終了し、吉澤と古川が運転する車で屋敷に戻った。

「あの……音楽の時間の話何ですけど……。」

リビングでダラダラしていた隼人に吉澤が話し掛けた。

「聞いていたのか？」

「望月くんの前の席だったたので……。」

「ふむ……。軽蔑したか？」

「いえ、そんな事はありません！……望月くんの言つとおりだと思いました。」

「だつたらどうしたんだ？」

「その……私にもチャンスを貰えませんか？」

隼人は深い溜め息を付いた。

「誰にでもチャンスは有るが……俺の場合は困難な道のりになるぞ？」

「それでも構いません！！何年掛かるようと必ずあなたを振り向かせて見せます！！！」

「そうか。頑張ってくれ。」

なんだか楽しそうに笑う隼人。吉澤は隼人の笑顔に触れて幸せな気持ちになつた

。

第10話

この日から吉澤の提案で、と言つより雇用者命令で手作り弁当を食べることにな

つた隼人。弁当だけ受け取り、いつもの大木に退避して食べていた。

「一緒に食べようよ！…」

隼人は下を向くと長谷川がいた。

「一人で十分だ！」

地上とそこそこの距離があるので自然と声が大きくなる。

「私がそっちに行くよ！…」

そう言つて、いそいそと登り始めた。しかしながら登る事が出来ず、危なっか

しい場面も何度かあった。

「分かつた。行くからじつとしてる。」

隼人は仕方なしに降り始めた。

「泥だらけになっちゃった。」

工へへと可愛く笑う。

「ところでさ、何でお弁当なの？もしかして手作り？」

隼人は顔を歪めた。

「だつたらなんだ？」

不機嫌な顔で答える。

「望月くんが手作り弁当受け取るなんておっどろき～！…」

「昨日の話を聞いていた奴がいてな、チャンスをくれと言われたんだ。」

「それでかあ～ 何だかんだ言つて楽しんでたりするんじゃないの？」

「鋭いな。だが、恋愛感情を持つことはない。」

「……嫌いなの？」

「そんな事はないが……。」

「いた - - - - !！」

シリアルスな雰囲気をぶつ壊し猛然と走つてくる人影が。

「山口さんだ。」

ボソッと隼人にとつて呪いの言葉とも取れる事を言つ長谷川。

「お昼食べよーー！」

真由美は速度を落とすことなく隼人へダイブした。が、隼人はスルー。変わりに

長谷川がつかんだ。

「なるちゃん、ありがとう」

いつもも増してハイテンションな真由美である。

「私が掴むつて思つてやつたでしょ？」

「あは。バレた。」

隼人は一人がワイワイ仲良くしているスキに歩き出した。

「望月くん、そのお弁当は誰の手作りかなあ？」

いきなり隼人の背後に現れた真由美は顔こそ笑っていたが、額に血管が浮かび上がつていた。

「お前には関係無い。」

「大あり！！望月くんの弁当は私だけ作れるんだよーー！それ以外は弁当として認めないんだからーー！」

「それはどうかと思うぞ。」

「私も作るーーー！」

「弁当は一つで十分だ。」

隼人が呆れ返つていたときに、長谷川が口を開いた。

「望月くん困つてるよ。お弁当は諦めてクッキーとかにしてみたら？」

「クッキーかあ…。うん、そうするーーー！」

隼人は安堵の息をついた。長谷川は何をおかしいのかクスクス笑っている。

「なるちゃん、どうしたの？」

「まゆちゃんってお料理全般苦手だつたよね？」

その場にブリザードが吹き抜けたかの沈黙。隼人は啞然として口をパクパクして

いるし、真由美は顔を真っ赤にして俯いている。

「お、お前…。上手く出来ないのに俺に喰わせようとしたのか？」

「練習すれば何とかなるかなって？」

「頼むからやめてくれえ～」

校舎裏に男子生徒の声が木霊した。

その後も真由美に色々と絡まれ、疲弊しきつた隼人。屋敷に戻ると自室でダウンしてしまった。

「入るよー。」

返事も待たずに入ってきたのは連華さん。

「許可無く入らないで下さいよ。着替えてたらビデオするんですか？」

「見る！」

即答に半ば呆れつつ、ベットから起き上がった。

「ご用件は？」

「明日映画でも見に行かない？」

「映画ですか……。」

決まつた友人なんていない隼人には特に予定は無かつたので2つ返事で承諾した。

「この事は愛理には内緒だよ？色々面倒な事になっちゃうから。」「構いませんが…。」

なぜ面倒な事になるのかイマイチ理解できていない隼人だったが、連華さんの言

うことは絶対、従うほか無かつた。

翌日、休みだというのに朝早くから吉澤に叩き起しられて少々不機嫌な隼人。

残暑残る9月末。黒のジーンズに女神がペイントされたなかなか才

シャレなTシャ

ツを着て連華さんと待ち合わせの駅へ。もちろん写真の少女に挨拶してから。

玄関を出ようとすると案の定吉澤に呼び止められた。

「お出掛けですか？」

「ちょっとな。」

「遅くならないで下さいね。」

顔を曇らせたまま吉澤は見送った。隼人は違和感を覚えたが気にしないことにした。

た。

駅に着くと連華さんだけでなく他数人の女子学生がいた。人数を訊ねていなかつた自分に苛立ちを感じながら、明るめに挨拶した。

「お早うございます。」

連華さん以外の女子学生はキャーキャー騒ぎ出す。隼人は何を騒がれているのか全く理解できずにいた。

「おはよー。」

「オハヨー。」

「お早う。」

この中で連華さんは一番上だ。各々自己紹介が始まつた。

髪が腰まで長く、お姉系の顔立ちが印象的なのが雪乃さん。

ゴスロリファッショング異様に似合うのは童顔幼児体型の美咲さん。お一方によれば隼人は「イケメンでマジヤバい」とのこと。ちなみに はご愛

嬌。書けない口調もあるのですよ。

やけにハイテンションで盛り上がりしている三人の遥か後方を静かに

歩いていた隼

人は自分の女運の悪さを呪つていた。

「……聞いてる？」

不意に雪乃さんが隼人に話を振つててきた。

「すいません、考え方してたもので。」

「彼女いるの？」

「いませんよ。」

コレが恋バナかと内心苦笑しつつ、冷静に答える。読者諸君には隼人の性格を熟

知していただいていいはずだ。

「嘘つきだあ！」

美咲さんはなぜか楽しそうにはしゃいでいる。隼人は来なければ良かつた、と心底思つた。

第1-2話

繁華街を通過して「パーティへ。ほとんど映画を見に行かない隼人は付いて行くだけ。女性陣は隼人がいかのようすに盛り上がっている。

「チケット買つてきます。運命で良かつたんですね？」

盛り上がっている最中申し訳ないと思いつつも、映画館に着いても話し込んでいる三人に聞いてみた。

「ええ。よろしく頼むわ。」

雪乃さんが即答する。隼人はいそいそとチケットブースへ向かう。

（女性陣）

「雪乃もしかして隼くんに気があるの？」

「そ、そんなわけ無いでしょ！！」

「顔が真っ赤だよ」

「そんなこと無いって！！確かに隼くんは顔は良いけど、私はあ

あいう空気を読

んで無さそうな子は嫌いなの！！」

「その反応怪しいな。」

「正直に言つちゃえ」

「そういう連華はどうなのよ？」

「隼くんはなかなかだと思つてるわよ。でも愛理がぞつこんでねえ。下手に手

を出したら殺されちゃうわ（笑）」

「答えになつてないわよー！まいいわ。美咲はどうなのよ。」

「私？そーだねえ……好きだよ」

「本気？」

連華と雪乃は飛びついた。

「本気だよ」

「それって……」

詳しく聞き出そうと雪乃が身構えた所に隼人が帰ってきた。一人一
つずつポップ

コーン付きで。

「ありがとう。いくらかしら？」

雪乃を始め代金を払おうとした面々は隼人にやんわりと断られた。
断るだけ断つた隼人はそのままシアターへ。

映画が終わると女性陣が号泣していた。恋愛ものだが最後に主人公
が死んでしま

うアメリカ映画には珍しいバッドエンドだったのだ。スタッフロー
ルが終わる前

に気を利かせて席を立つた隼人。

長時間座っていたので凝り固まった体を解すように背伸びをする。

「ごめんねえ」

まだ目元が赤いまま連華さん達が出てきた。

「いえ、構いませんよ。お昼過ぎてますし、どこか食べに行きませ
んか？」

「いいねえ。お腹すいたし」

美咲さんはノリノリで賛同する。

「悪くないわ。」

「そうね。」

結局は女性陣のペースに飲まれて、三歩後方を歩く隼人。元より会
話に参加する

氣など無いので、フラフラしている。

繁華街の角で露店を開いているのを見つけ、興味本位で立ち寄った。年配の白髪が特徴的なおじさんが店番をしており、隼人に早速声を掛けた。

「気に入つた物があつたかね？全てワシの手作りでな。決して同じ物はないぞ。

「シルバーを大事そうに見つめるおじさんからは職人としての品格がひしひしと伝

わってきた。隼人は馬のデザインが施された指輪に目が止まった。

「ん？ああギルダーの指輪とな？若いのに良い目をしてある。」

おじさんはギルダーの指輪と呼ぶ指輪を取り隼人に手渡した。

「ワシが作った中では最高の品じや。刻んである馬をギルダーと言
う。幼い頃良

くこの馬と遊んでの。あの日が懐かしいわい。」

ほほほ、と快活に笑うおじさんは幸せそうだった。

「コレ、頂けませんか？」

思つてはいるほど高くはなく得した気分になつていると、隼人を探しに戻ってきた。

連華さん達に睨まれた。

第13話

中華で昼を済ませた隼人は体調不良を理由に帰宅する事にした。唯一絶対の安息の地である自室に文字通り引きこもり、指輪を眺めていた。しかしこの不可侵の領域を主のア秉承を得ずに侵入するのが、吉澤と言う人間で…。

「綺麗な指輪ですね。」

「ノック位しろよ。」

「私と望月くんとの間には壁なんて存在しません。」

「マナーだろ…。」

さりげなしに突っ込みを入れる。

「明日も休みなんですし、出掛けませんか?」

「ドコへ?」

「パーティーに招待されているのですが…

「金持ち同士のか?」

「そうなりますね。確か金沢グループの創立10周年記念パーティーだったような

…。

「面倒くさい。それに正装なんだろ?」

「当たり前ですよ。私はドレス。望月くんはスーツです。」

「ご機嫌取りのパーティーに何で行かなくてはならんのだ?招待さ

れてるのは吉

澤だけだろう?」

「それはそうですけど……寂しいじゃないですか。」

「知らんわい。」

「追い出しますよ。」

「パーティーは明日だっけ?」

追い出すと聞いて一八〇。態度を改める隼人。よほど恐れていると見える。

「スーツは持つてますか？」

「着る機会無いから持つてないな。」

「新調させましょ。明日までには準備させておきます。」

「サイズはどうするんだよ。」

「望月くんの事で知らないことはありませんよ。」

邪悪な笑みをたたえながら返事をする。

「俺のプライバシーは？」

「皆無です。」

きっぱりと宣言。

「ハア。俺は俺の権利を守る……お前なんかに屈したりはしない！」

「言いましたね。ウフフ」

不敵に笑いながら吉澤は部屋を出て行った。隼人はその笑顔を見て鳥肌が立った。

。

夕食後の風呂は消化に良くないが、貧乏生活の名残で止められない。

本来は風呂

が沸く時間を利用して食事をする目的であったが、屋敷は掃除の時以外いつでも

風呂に入ることが出来る。

脱衣所に人影を確認した瞬間、ガラガラと全裸の吉澤が入ってきた。

「何で入つてくるんだよ！！！」

「私達の前には壁はありません。」

「お前、恥ずかしくないのか？」

「望月くんに見られるのなら構いません。」

ザバーツと風呂に浸かり接近する吉澤。風呂が広いのが幸いしてか、逃げること

が出来た。

「何で逃げるんですか！！！」

「逃げるわい！！！」

「男性は喜ぶんじゃないんですか？」

「どこで仕入れてきた情報しゃい！！！」

逃げているにも関わらず突っ込みは忘れない。

「雑誌です！」

二人が風呂で鬼ごっこしているので湯がかき回され、もうもうと霧のごとく湯気が立つた。

コレを好機に隼人は素早く脱出を試みる。吉澤は風呂から出ようと
しているのを

“女のカン”で察知し、捨て身のダイブ！！隼人の骨盤当たりを掘
むも、濡れてい

たので手が滑り逃がしてしまった。隼人は必死に走り、浴槽から出て
脱衣所に辿り

着いた。

素早く腰にバスタオルを巻き、戦闘態勢へ。

ほどなく風呂から上がってきた吉澤の全裸を拝んだ隼人。

「どうして逃げるんですか？」

「湯冷めするぞ。タオルを巻け。話はそれからだ。」

ごく自然に接する隼人は男としての品格が欠如しているように思わ
れて仕方無い

。男性諸君、この状況をどう感じるかね？

「分かりました。」

口をとがらして、隼人が差し出すバスタオルを受け取りいそと
巻き始める。

「さてと…。どうして入つてきたりした？俺が入つているのは知つ
ていただろ？」

「夫の背中を流すのは、妻としての務めです。」

今時、新婚だつてやつていい事を吉澤はやろうとしていたのだ…！

「…。その情報はどこで仕入れた？」

「ネット小説です。」

「…。」

開いた口が塞がらないとは正にこのことだらう。隼人曰わく、「あ
の時はどうし

ようか真剣に考えていた。と。

「そのな……ネット小説の場合はその場の雰囲気を盛り上げるためにだな……」

あたふたしながら必死に説明する隼人をよそに、宙を虚ろな目で見る吉澤。

「ねえ……」

「なんだ？ 理解してくれたのか？」

「バスタオル姿つて萌えるんだよね？」

もしも隼人が口に何かを入れていたら盛大に吹いただろう。

「分かってもらえたかったのか。」

吉澤が案外天然？な事を知った隼人だった。

「取り敢えず俺は着替えるから、吉澤は風呂に入れよ。」

安全策を講じる隼人。

「分かりました。」

すんなりと要求をのんだ吉澤は単に風呂に入りたかつただけのようだ。つまり隼人は追い出された訳で……。

さつさと着替えて自室に戻った隼人は吉澤の奇行について思案し始めた。

「お茶しない？」

入ってきたのは連華さん。姉妹揃つてプライバシーの6文字は存在しないらしい。

「雪乃がねえ、隼くんのこと気に入っちゃったみたいなのよ。」

紅茶をカップに分けながら、問題発言を簡単にする。

「気に入つて頂けるのは有り難いんですが、それにしては態度が冷たくないです

か？」

「雪乃はああいう子なのよ。あれでもかなり友好的なんだけど……。」

「

言葉を濁しながら、連華さんはいつ。

「愛理の事、分かつてているんでしょ？」

「ええ、告白は……一応されましたから。」

「そつか。明日パーティーに行くみたいだけど、頑張りなよ。連中
は結構ねらつ

てる奴がいるんだから。」

激励をした後、連華さんは部屋を出て行った。

日付が変わつて夕方。吉澤が準備したスースを身にまとい、イケメン隼人となつていた。屋敷の女性陣が見惚れてしまつてゐる。

「服装一つで変わるもののねえ。」

「いつも地味だから気付かなかつたけど、イケメン……」

「うわあ、ナルシストみたいですうー」？

分かつてゐると思うが順に、弥生さん・連華さん・吉澤だ。
思い思いの感想にげんなり萎え氣味の隼人は内心もつとマシな感想はないのかよ！！

、と叫んでいた。

「それなら金持ち連中を一撃で沈没させれるわよ！」

妙に力説する連華さんは魔女のごとき不気味なオーラを出してゐた。

「そんな事より時間無いんじゃ……」

時刻は6時を回つていた。パーティーは7時からなのだ。

「愛理、急いで準備！！」

弥生さんが半狂乱になつて叫ぶ。既にドレスに着替えていた吉澤はバックを掴ん

で玄関へ走り出した。まだ屋敷の構造を把握仕切れていない隼人は遅れまいと、吉澤に付いていった。

出発の騒動が一段落した車内。

「隼人くん。」

弥生さんが隼人にソツと耳打ちしてきた。

「パーティーで愛理に近付く虫は排除して貰つても構わないわよ。
何をしても吉

澤が解決するから安心してやりなさい。」

「つまり、殺人許可が降りたということだ。吉澤財閥には隼人も知らない裏の顔があるのだろう。

「こういった社交パーティーは初めてだと思うけど、気楽に行くのよ。それと愛理に危害が加わらないようにお願いしますね。」

「心得ました。」

「そんな堅苦しいこと抜きで楽しみましょうよ！」

「仕事には私情は挟まない。それがボディーガードの基本だ。」

「そうかも知んないけど、楽しく無いですよ～。」

「俺は俺で楽しむさ。心配しなくても構わない。」

隼人は吉澤の視線から逃れるように窓から空を見上げた。

「……私では不満ですか？」

何気ない一言だが、核兵器級の威力はあった。隼人は慌てふためき次の言葉を探

しているし、弥生さんはどうフォローすればいいか困りきっている。

「いや……あ……そのな、不満とかじやなくてだな……。」

「だったら私といて下さいよ～。」

上目遣いでおねだりして来ても隼人には通じるわけがない。が、今回は隼人が折

れた。弥生さんは同情の目を隼人に向けるも、本人は気付いていない様子。

一時期車内は修羅つたものの無事に豪邸についた。吉澤の屋敷は豪邸という感じがしたがここはまさしく城だった。

「見とれていては田舎もの扱いされるわよ。」

弥生さんが可笑しそうにクスクス笑っている。

「では、参りましょうか？」

吉澤はそつと隼人の腕を取つて城へ誘つた。

「吉澤様で御座いますね？」
受付を顔パスで通ろうとして呼び止められた。係員が訝しげな表情で隼人を見て
いる。

「私の専属ボディーガードです。」

「大変申し訳ありませんでした。どうぞお入り下さい。」

無事受付を通過した俺たちは、城のホールへと向かった。

「愛理じやないか！！」

金髪碧眼でどこからどう見ても貴族のおぼっちゃまが吉澤の元へ歩み寄ってくる。

「元気にしてたかい？」

「え、ええ。」

ぎこちない笑顔から彼は苦手なんだろう。

「僕は君に会えなくて、寂しくてたまらなかつたんだよ。」

「そ、そうなの。」

助けてと言わんばかりに隼人をチラ見する吉澤の挙動をみた金髪青年は声を掛け
た。

「失礼だが、君は？」

「彼は私のか……」

「ボディーガードです。」

吉澤がとんでもない事を言つ前に建て前を説明する。

「そ、うかい、僕の愛理を守つてくれてありがと。そうだ！今
田は君の代わ

りに僕が愛理のボディーガードをしよう。君は休んで貰つても構わ
ないよ。」

「有り難き幸せ。お言葉に甘えさせて頂きます。吉澤様をよろしく
お願いします。

。

チャンスは逃さずそのまま吉澤の元を去了た。

「後は僕達で楽しもうよ。」

不適な笑みを浮かべた金髪青年はそのまま吉澤とダンスに興じた。

一方隼人は飯を取つて壁の華を決め込んでいた。

「見かけない顔ですわね。」

「吉澤様のボディーガードをしている望月と申します。」

「あら、愛理のボディーガードですか？頼もしいですわ。よろしければ私と踊つて頂けませんこと？」

「ワルツしか出来ませんが、よろしいのですか？」

「十分ですね。」

謎の金髪碧眼美女に誘われて、隼人はダンスフロアに入つた。

「お上手ですこと。」

実際金髪美女がリードしていたのだが何故だか隼人は褒められた。

「大変恐縮で御座います。」

「かしこまらなくとも構わないのよ。望月さん。」

「私は使用人ですので…。この様な姿を吉澤様に見られれば解雇されてしまうでしょう。」

「いざとなれば私の屋敷にお招き致しますわ。大丈夫、ご安心なさいな。」

金髪美女にたいそう気にいられたご様子。

「有り難き幸せ。自分には勿体無く思います。」

なぜかウットリするような眼差しで隼人は見られていた。

「望月くん！こんな所に居たんですね！！！」

吉澤が金髪青年を従えてやつて來た。

「どうなさいました？」

最大級の営業スマイルで応える。

「そろそろ帰りましょう。」

「かしこまりました。弥生様にお声を掛けて参ります。では。」

「またいらして下さいね。」

金髪美女は名残惜しそうにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5621d/>

プリンセスにドキッ

2010年10月28日05時30分発行